



写真解説 右頁「小栗判官一代記」の演目で主役の“小栗判官”とそれを操る人形遣いの池上勇さん。精神を研ぎ澄まし、人形を操る。①舞台本番前。ロクロ車を腰にひもで縛り集中力を高める。②小栗判官の父が怒り狂う場面を演じる池上喜雄さん。一心同体。人形に魂を宿し全身全霊を演技に注ぐ。③人形遣いがひとたび人形を操ると、まるで生きているかのような表情を人形が見せる。④人形遣いが悲しめば、人形も悲しむ。人形が悲しめば、人形遣いも悲しむ。⑤公演開始を告げる拍子木を力強く鳴らす4代目座元。⑥人形遣いと人形が「会話」をするには経験が必要だ。⑦車人形の所以たる“ロクロ車”に腰をかけることで、足を自由に動かすことが可能に。3人で操る文楽人形とは一線を画す。⑧公演終了後のカーテンコール。この日は地元、竹間沢小学校での公演。演技が終わり安堵の表情に。



復活公演から40周年“竹間沢車人形”

特集

受け継がれる灯

昭和47年6月18日、三芳町立中央公民館に集まった観衆の目は、約50年ぶりに演じられた郷土芸能「竹間沢車人形」に釘付けとなりました。それから40年。その間、竹間沢車人形保存会の努力によって、毎年数々の公演が行われてきましたが、なぜ“復活”公演が行われたのか、なぜ竹間沢に車人形が伝わったのか……。その謎に迫ります。

check

車人形を受け継ぎ、現存するのは全国で埼玉県三芳町“竹間沢車人形”、東京都八王子市“八王子車人形”、東京都奥多摩町“川野車人形”の3つのみ。とても貴重な郷土芸能が三芳町には残っています。
(右の写真は本番前の舞台袖の様子。ロクロ車の準備をする。人形は本番に備えてお休み中。)



車人形の伝来

車人形とは、人形遣いがロクロ車(左頁写真7)に腰をかけ、人形を一人で操れるようにしたもので、その姿から車人形と呼ばれる従来のもをを発展させ、少人数でも公演を行うことが可能となり、演出の幅が広く、テンポの速いものや激しい動きができることが特徴です。

竹間沢にその車人形が伝わったのは、幕末に近い安政年間(1854~1860)のはじめ。

竹間沢の前田左吉さん(芸名・左近)のもとに、西多摩郡二宮村(現東京都あきる野市)から人形芝居家元の六代目「薩摩若大夫」の長女ていさんが嫁いできたことがきっかけとなり前田家では、ていさんの実家の応援を得て、親戚・縁者で車人形を習得しました。

竹間沢車人形の全盛と衰退

人形芝居の伝習を受けた前田家では、左近さんを座元として「吉田三芳座」を組織し、ていさんが三味線をひき説経節を語り、操り手を加えた総勢5~7人で、近隣の村々や遠くは千葉県・神奈川県など各地を興行してまわりました。明治19年に息子の信忠さん(芸名・民部)が二代目座元になると興行はますます盛んになっていきました。

明治時代に人気を集めた車人形でしたが、大正時代になると、浪花節や新派劇、さらには映画も大衆化してくる中で、車人形の興行数は減っていき、やがて興行の灯は消え人々の記憶にも遠いものとなってしまいました。